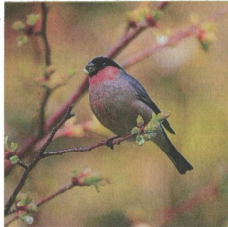
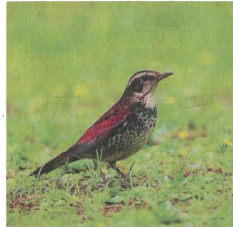


遅い飛来 早い旅立ち

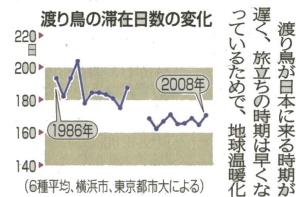


渡りの時期が温暖化の影響で変化していることが分かった鳥の一つ、ツグミ(左)とウゾ(真木広造さん撮影)

冬鳥あわただしい滞在

秋に飛来し、春先に北の繁殖地に飛び立つ渡り鳥(冬鳥)の日本での滞在期間が1990年に比べて約1カ月も短くなっていることを、横浜市内での観測データを基に、東京都中の小堀洋美教授(仮主物学)が3日までに、突き止めた。

東京都市大教授 横浜で調査



温暖化影響約1カ月短く

渡り鳥が日本に来る時期がと都市部のヒートアイランド現象の結果、横浜市の年間平均気温が約1度高くなったことが、鳥の渡りに影響を与えたと見られる。同様の傾向は北海道や九州の渡り鳥でも見られているという。

地球温暖化が渡り鳥の行動に影響を与えていると、日欧州や米国ではあるが、日本での調査は少なく、温暖化の生物への影響を知る上は、長い進化の歴史の中で、南半球から北極圏にまで飛行することもある鳥の渡り行動が変化するれば、幅広く生態系に異変起こす懸念も

生態系に異変起こす懸念も

逆には終日は6種全てで早く、36日も早まった。この結果、6種平均で半年余りだった日本での滞在期間が29・7日短くなった。

小堀教授は「温暖化の影響は今後、さらに顕著になるとされる。渡りなどの生態の変わりを持つ他の生物や生態系に与える影響などを含めて、さらに詳しい研究が必要だ」と話している。

食べ物になる植物の種子が既になくなっていくように、植物の結実時期の変化と渡りの時期が対応しなくなるなど、鳥の生態に困難が生じる可能性がある。今後の変化や種の動向に注目していきたい。

団体、バードライフ・インターナショナルの専門家は「越冬地や繁殖地、その間の休息地など広い範囲を利用する渡り鳥は、地球温暖化の影響を特に受けやすい種の一つだ」と指摘する。

鳥の渡りは、秋に植物が実をつけたら、春先に昆虫が大量に発生したり、といった餌になる生物との微妙な関係の上に成り立っているため、気候が変わると鳥が十分な餌を捕れなくなる可能性がある。旅の途中で、異常気象、海面上昇や高潮で沿岸の休息地が失われることも心配される。

鳥は、多数の昆虫を食べることで虫の個体数を一定に抑えているし、植物の種子の拡散や受粉などに重要な役割を果たしている鳥もいる。行動パターンが変われば、生態系に大きな変化をもたらす恐れもある。

興味深い研究成果

樋口広芳、東京大名教授の話
冬鳥の渡来時期が変わり、しかも大きく変化しているというは興味深い研究成果だ。鳥が飛来した時期に、

最初に見られた日(初見日)や最後に見られた日(終見日)などが分かる。

小堀教授が、ウソやオジ、ツグミなど毎年飛来した6種類の冬鳥のデータを解析した結果、86年から2008年までの間に、ほとんどの鳥の初見日が年々遅くなり、最も変化が大きいツグミではこの間に約19日遅くなっている。

食べ物になる植物の種子が既になくなっていくように、植物の結実時期の変化と渡りの時期が対応しなくなるなど、鳥の生態に困難が生じる可能性がある。今後の変化や種の動向に注目していきたい。